

Y5-28

医療ケアが必要な小児の在宅ケアにおける病院と地域連携

高山赤十字病院 医療社会事業部 医療社会事業課¹⁾、

高山赤十字病院 医療社会事業部 地域連携課²⁾

○小嶋 昌久¹⁾、鴻巣 眞美子¹⁾、谷口 美幸¹⁾、

和田 功輔²⁾

【はじめに】高山市には、障がい児を地域で支えるためのネットワーク会議があり、定期的に会議を実施している。今回報告する症例は、人工呼吸器装着の障がい児が安心して在宅療養を送るための支援として、障害者生活支援センターが中心となり、必要なサービスをコーディネートした。しかし、医療依存度が高いため、福祉分野と医療分野との専門性の違いにより、連携にずれが生じた。そこで、MSWがコーディネートすることにより、医療と福祉が協力し合い、そしてお互いがより専門分野を発揮できる環境を整えることができたので、報告する。

【症例】10代男児、出生時仮死状態 脳性麻痺 てんかん発作により入退院を繰り返している。現在人工呼吸器装着状態。親族は両親、妹の4人家族。祖父母は、父方は血縁関係なく、母方は他県で遠方。親族による支援は乏しく、母親は、リウマチ、腰部椎間板ヘルニア、DMにより介護が非常に困難な状態である。行政、サービス事業者が全面的にサポートすることで何とか在宅療養できている。

【地域医療連携】この症例を通じて、病院の役割を再認識、確認できた。病院主導ではなく患者中心であり、地域が主体となり患者、家族をフォローすることで医療と地域福祉との連携を図ることができ、医療依存度が高くても、在宅療養を可能としている。

【まとめ】当院は急性期病院でありながら、僻地にあるため、小児科に関しては、障害を抱えた子どもたちをそのまま当院外来でフォローしている。今後ますます在宅療養が重視される中、日々成長する障がい児を地域で支えるために、各関係機関とよい連携体制をとることの大切さを痛感した。

Y5-29

地域が求める思春期教育 ―思春期相談窓口開設へ―

深谷赤十字病院 看護部

○丸岡 希美子

【はじめに】ここ数年、本務病院近郊の小学校、中学校、高校に赴き生徒を対象とした思春期講演を行い、命の大切さや人間の尊厳について話している。最近になって学校関係者からの依頼や問い合わせ、思春期に関する相談が多く寄せられるようになり、思春期教育への関心や生徒達の悩み事の高まりを感じている。平成19年、学校現場が求める思春期教育に関するインタビュー調査を行った。この調査結果と、その後看護職による思春期相談窓口を開設したのでここに報告する。

【研究方法】時期：H19年10月3日～H19年10月23日 対象：思春期講演を実施した小、中、高校の養護教諭および保健主事教諭6名 方法：研究に同意した教諭に対し半構成的面接法でインタビュー調査を行い、逐語録を作成した。データはカテゴリー化し、質的分析を行った。その際、倫理的配慮について明記した。

【結果】1.性に関する知識は生徒の個人差が大きい 2.学校で指導する時間が無い 3.適切な指導案が存在しない 4.教諭自身が思春期教育を受けていない 5.自身の主観を話すよう指導しづらい 以上のような戸惑いの意見が理解出来た。

【まとめ】思春期教育に関する学校現場の戸惑いを理解すると共に、思春期に関する専門的知識を持つ看護職が、地域や学校現場と連携を取りながら、思春期教育を継続して推進することの重要性を感じた。この結果を生かし、平成21年1月より看護職による思春期相談窓口を開設した。ここでは、性教育講演の受付、思春期の妊娠や性感染症に関する相談、思春期の身体的精神的悩みに関する相談を受けている。今後とも地域と連携を持ちながら思春期支援に力を注いでいきたい。